

木下 裕久 論文内容の要旨

主 論 文

Nagasaki Schizophrenia Study: Influence of the Duration of Untreated Psychosis on Long-term Outcome

(長崎統合失調症研究：精神病未治療期間 (DUP) が統合失調症の長期転帰に与える影響)

Hirohisa KINOSHITA, Yoshibumi NAKANE, Hideyuki NAKANE,

Yuka ISHIZAKI, Sumihisa HONDA, Yasuyuki OHTA, Hiroki OZAWA

(ACTA MEDICA NAGASAKIENSIA ・ 50 巻 1 号 17-22 2005 年)
〔 6 頁 〕

長崎大学大学院医学研究科 内科系専攻
(指導教授：小澤寛樹教授)

緒 言

初発の統合失調症患者における精神病未治療期間 (Duration of Untreated Psychosis: DUP) すなわち明らかな精神症状が生じてから、初めて精神科医療機関を受診し適切な治療を開始されるまでの期間に関する研究は、諸外国では、これまで多数なされている。DUP が短縮することで転帰が改善されるのではないかというのが DUP 研究の作業仮説であり、初発の統合失調症患者において、長い DUP は短い DUP と比べて、より不良な短期転帰をもたらすということが明らかになってきている。しかしながら、これまでの研究は、後ろ向き研究であったり、統合失調症の定義があいまいであったりし、また長期の転帰までを検討したものは少なく、特に本邦では極めて少ない。そこで本研究では、国際疾病分類 ICD-9 に基づいた厳密な定義で採用された初発の統合失調症患者を対象として、DUP の調査を行い、追跡開始から、1 年 2 年 5 年 10 年 15 年の各時点における転帰と DUP との関連について検討し考察を加えた。

対象と方法

我々は、以前より、WHO (世界保健機関) の指定研究協力センターの一つとして、長崎市における初発統合失調症の患者に対する長期の追跡研究を行ってきた。本研究は、WHO 共同研究である重度精神障害の転帰調査 (Determinants of Severe Mental

Disorders)における対象者107名のうち、未治療期間(DUP)が測定できた97名を対象とした。そして、未治療期間と各追跡調査年度の転帰との関連を統計学的に検討した。症例の採用期間は、1979年1月1日~1980年12月31日の2年間であり、長崎市及びその近郊の約30の精神科医療機関の協力のもとに行われた。症例の採用には、ICD-9に基づく採用基準が使われた。調査員(訓練された精神科医師)による初回の面接後、採用基準をみたし、本人及びその家族より同意の得られた対象者に対して、WHOが開発した評価表にそって、調査員による構造化面接が行われ、詳細なデータが集められた。

結 果

97名のDUPの最小値は1ヶ月、最大値は、132ヶ月であった。DUPの三つ組みの値(すなわち第1四分位、第2四分位、第3四分位の各値)は、(1,4,12)ヶ月であり、平均は9.9ヶ月であった。15年の経過中に5名が亡くなり、52名が追跡可能、40名が追跡不可能であった。10年後の調査までは、完全寛解を持つ群(転帰良好群)が統計学的に有意、あるいは有意な傾向をもって、完全寛解を持たない群(転帰不良群)より、短いDUPを持っていた。1年後調査における転帰良好群のDUPの三つ組みの値は(1,3,4)ヶ月で、転帰不良群のDUPの三つ組みの値は(2,6,12)ヶ月であり、Wilcoxon順位和検定において、 $P=0.036$ と有意差を認めた。同様に、2年後の転帰良好群と不良各群のDUPの三つ組みの値は、(1,3,4)と(2,6,17)ヶ月で $P=0.021$ 、5年後の転帰良好群と不良各群のDUPの三つ組みの値は、それぞれ(1,3,8)と(1,6,17)ヶ月で $P=0.149$ 、10年後の転帰良好群と不良各群のDUPの三つ組みの値は、(1,2,3)と(3,6,12)ヶ月で $P=0.008$ であった。しかし、15年後に関しては、転帰良好群と不良群の三つ組みの値が(1,4,12)と(1,4,9)ヶ月で $P=0.828$ となり、両群での差を認めなかった。

考 察

先行研究により、DUPが初発から1年~3年程度までの短期間の臨床的転帰の予測因子になりうるということが報告されている。しかし、それ以上の長期間での検討は、報告数が少なく、また方法論的な問題もあり、DUPが長期転帰に関連するかどうかの結論は出ていない。本研究の特徴は、初発時に厳密な基準を持って集めた均一な集団を1年,2年,5年,10年,15年と経過を追ったという点で、DUPに関する研究では他に類をみないことであるが、それでも長い経過のうちに脱落する症例も多く統計的な解析もその分難しいものがあつた。しかし、少なくとも10年後の転帰といふかなり長期間にわたって、初発時のDUPがその転帰に影響していることが確認された。15年後転帰に関しては、その他の要因、例えば、受診後の治療状況、本人をとりまく社会的支援、家族からの支援、そして生活習慣などの影響があつて、DUPの関与がはっきりしなくなるものと考えられる。以上のことから、初発の統合失調症患者が速やかに精神科医療機関を受診することにより、長期にわたる良好な転帰を辿る可能性を鑑みると、精神障害に関する啓発活動や精神疾患の早期診断、早期介入プログラムの充実が望まれる。